

1990 年度下半期報告書

一橋山岳部

1. 巻機山～朝日岳

参加者；古田、天羽

1990 年 10 月 21 日（くもりときどき小雨）

米子沢出合（8：30）→巻機山（14：00）→柄沢山（17：00）

あいにくの天気だったものの、紅葉を見ながら快適に沢を上り詰めた。上部のゴルジュ地帯の高巻きのとき、左右両岸から行けたので別々の方向に行ったのだが、下降地点がちがいため2人がはぐれてしまったのが反省点である。その後予定では檜倉山までだったのだが、天羽のペースが遅く、暗くなったので柄沢山でテントを張った。

1990 年 10 月 22 日（はれ）

柄沢山（5：30）→朝日岳（12：00）→土合（16：00）

朝日岳までやぶこぎが続いた。ところどころ道のわからない箇所があり苦勞した。前日に引き続きゆっくりしたペースだった。

2. 中房温泉～燕岳～大天井岳～常念岳（冬山偵察）

参加者；山内、田形（文責）

1990 年 10 月 25 日

夜行で立川駅発

1990 年 10 月 26 日（雨）

未明の 3 時ころに穂高駅に着く。同じように燕岳へ向かう2人のパーティーがいたので、4人でタクシーで中房温泉まで行く。天気は悪く、雨が降っていた。

一緒に来たもうひとつのパーティーは、先に登って行った。自分たちは雨が小降りになるまで待った。

この日は、ひたすら登りできつかった。合戦小屋あたりからは、雪がしっかりついていた。偵察ということで、途中で山内さんが写真を撮ったり赤布をつけたりしていた。

自分のはじめての雪山だったので疲れたが、昼の 1 時ころには燕山荘に到着。山荘前のテント場に幕営した。そして、ここから燕岳山頂までピストンした。初めて雪山で寝ることになったけれど、寒くてほとんど眠れなかった。

1990 年 10 月 27 日

朝 6 時ごろ（？）出発。あまり天気は良くない。初めてアイゼン・ワカンを使うことになり、とまどっ

た。この日も、途中で山内さんが写真を撮ったり、ルートの様子を確認したりしていた。自分は疲れていてなにも偵察としての役は果たしていなかった。難関とされていた蛙岩も思ったほどではなかったようだ。

自分にとってはきつかった大天井岳直下の登りを登りきって頂上で 2 人で記念写真を撮って今日の幕営地である大天荘へ。大天荘へ着いてみると、自分の片方のアイゼンがないことに気づく。仕方がないけれど、また大天井岳の方に戻って探しに行く。すぐに見つかるだろう思っていたけれどもなかなか見つからず、ついには大天井岳頂上からまた下ってしまうことになった。ずいぶん時間経ちもう見つからないから引き返そうと思っていたらやっと見つかった。山内さんには、アイゼンがないことに気づかないとは・・・と注意を受けた。

今回の山行の食糧担当は自分だったが、我ながら食事をつくるのはヘタだな、とってしまった。山内さんがなにも文句を言わずに食べてくれたのは有難かった。他の人なら、こうはいかないだろう。

1990 年 10 月 28 日(晴れ)

この日は朝からとても天気が良かった。朝、出発する前には、眼下には雲海が広がっていた。途中で、たくさんの猿が日のあたる斜面で日光浴をしているのを見かけた。

常念乗越から苦しみながら常念岳山頂に到着した。山頂には、他にも 2, 3 人の人がいた。予定としては、蝶ヶ岳方面まで行く予定だったけれども、ここから前常念の方面に下りることにした。なかなか急な道を下りて車道にたどり着いた。しかし、この道にはバスは走っていない。山内さんはどんどん先に行ってしまった。自分もたらたらと歩いていたが、後から来たおばさんハイカーの車をヒッチハイクして豊科駅まで行くことができた。途中で山内さんを拾おうとしたけれど、その時山内さんは少し車道をはずれたところを歩いていたとのこと……。なにはともあれ、2 人とも無事この日のうちに帰京した。

3. 燕岳～大天井～常念～前常念～三俣(冬合宿偵察)

メンバー;山内(文責)、田形

1990 年 10 月 26 日

中房(5:30 雨～8:00)→第 1 ベンチ(8:30 晴れ)→ケーブル(9:00 晴れ)→2, 250m (10:00 晴れ)→合戦小屋(10:50 雪)→燕山荘手前(12:00 雪)→テント場(12:30～13:30)→燕岳往復(雪 強風)

1990 年 10 月 27 日

スタート(7:30 雪)→蛙岩(8:45 雪)→切通岩(喜作)(12:30 雪)→大天井岳頂上(13:50 曇り)→大天荘テント場(14:15 晴れ)

1990 年 10 月 28 日

スタート(6:30 快晴)→西大天(7:45 快晴)→常念小屋(10:00 快晴)→常念山頂(11:15)

総括

この山行は偵察の域を越えるものであった。とくに田形は冬山未経験なのでそう感じたことであろう。また、彼の足の故障のため、常念で予定を変更せざるを得なかったことも基礎体力不足を改めて認識させてくれた。

しかし、目的は大方達成できたのではなかろうか。冬合宿でポイントになるであろう燕山荘直下、蛙岩、切通岩、大天井岳直前、西大天通過と十分な情報を我々は得ることができた。これには、ヒザまでの降雪が手助けしている。

また、今回はスライド写真を活用し、より効率的に他部員にイメージ、構造図を伝えることができたことも、冬合宿をスムーズにこなせた理由となろう。

4. 親不知～白馬岳(春山偵察山行)

メンバー:天羽、古田(文責)

今にして思えば、旧一橋山岳部(部外者ながらあえてこう呼ばせて頂きたい。新しい一橋山岳部の発展を祈りつつ)のバブルが今やはじけんとしていた時期かもしれない。しかし、当時においては、山行計画も軌道に乗り試行錯誤の中に自分にとってのパイオニア***最もたぎらせていた時というのもまた事実である。

知らないことばかりだから、自分で見つけ出すより他ない。山をやる上でこれほ***しいことがあるだろうか。上級生がいないということは、すべてを自ら決*できるまたとないチャンスと考えるのも一つの前向きの姿勢であろう。

1990 年 10 月 29 日

立川発0:17急行アルプスにて出発

1990 年 10 月 30 日(晴れのち曇り)

8:14 親不知駅 同駅発8:30 9:30拇海新道の大きな看板のある登山口着。

一旦海岸まで下りて日本海に触る儀式。10:15*山発

今回は偵察ということで、木登りを*ねつつ赤布をつけて行く。シブイ山域だけあって、他人のマーキングは乏しく、あてにならない。11:35~12:15入道山。

当然の如くこの辺りはいわゆる北アという感じは全くない。登山道は相当に整備されており、難しい。海拔ゼロメートルから歩くというのは、不思議なくらい一步一步価値あるものを感じさせる。寂しさというより眠りに入る前のホッとしたぬくもりのようなものを感じさせる秋山は、踏みしめる落ち葉が小気味よい。

坂田峠後の急登後しきわり(シキ割)までは稜線ははずす。地形自体複雑だが、だからこそほぼ稜線近くを水が流れているのは助かる。14: ** ~ 15: 15頃しきわり(シキ割)テント場(一張りが精いっぱい)に到着。

1990年10月31日(曇りときどき雨のち晴れ)

5:00起床 6:13発 白鳥(山)の登りはたいしたことはないが距離*ある。この辺は木の丈が低いので、積雪期は雪の下という気がしないでもないが、少しづつマーキングをしながら行く。積雪期なら泊れそうな広い場所には*かない。黄蓮の水場も稜線近くかつ水量*多い。ばらついた雨があがって久しぶりに見た虹は、一帯のさして彩やかとも言えぬがそれゆえにかしっくりとした紅葉に映え*。

犬ヶ岳の手前、西側のガレたあたりをすこし過ぎたあたりから似虎谷の水場を下りる道があるが途中にアリ地獄のようなザレがあり恐怖*水汲みになるので遠くても北又(俣)の水場を利用すべきであろう。榎海山荘は、立地条件、小屋ともに最高。

5:00PM ころ山頂からは日本海へ沈みゆく夕日、白き剣、朝日近くは月明かりに山なみをなでる白い雲が映える。漁火を日本海に覚えつつさわがに山岳会には感謝。

1990年11月1日(快晴)

4:30起床。見事にすっぱり移動高。5:30素晴らしき小屋をあとにした。犬ヶ岳より先は、無雪期は全然問題ないが、それなりのナイフリッジ、積雪期は注意がいろいろ。

山腹を、熊とおぼしき黒い物体が猛然たる鼻息をたて駆け下りて行った。「さわがに山」をすぎたあたりからまた植生が大きく変わり、榎のトンネル。なだらかな地形そしてとうとう美しい清流の流れる黒岩平に至る。平とはいえ、かなり登りを強いられつつアヤマ平へ。ここからは、新雪を踏んで行く。長榎山は展望、地形ともよいが、広いので道がわかりにくく、何度か榎の藪をこぐ。朝日岳を左側を巻くようにして山頂へ。

13:00長い榎海新道は終わった。今日は朝日山腹に幕営、満月と白馬連山、月明かりがまぶしすぎる。

1990年11月2日(晴れのちガス)

ゆっくり出発。赤男山のトラバースは、水量豊かな小桜原に行く。このトラバースは多分積雪期も問題ないと思われる。雪倉岳は「倉」と言うだけあって北西～西面を岩に囲まれたどっしりした山。夏道は、北斜面をトラバース、北北東への枝尾根から行くが、できれば冬この斜面は通りたくないもの、と思いつつ天羽は夏道を、古田はそのまま稜線を行くことにした。稜線上には人影らしきものが見えたので、直上できるかも、と思ったのだった。そして出来た。ただし、上部はピッケル、アイゼンを十分にきかせての雪壁登攀になってしまったが。一か所、落石の通り道の如きルンゼを登るハメになったが。人影と思ったのはどうもカモシカだったらしい。

天羽のほうは、夏道ははずしてしまい、これまらルンゼを登って痛い目にあつたらしいが。結論と

しては、結局冬も北斜面をトラバースするしかないらしい。

このころからガスも出てきた。風もつよい。山頂を素通りし雪倉岳避難小屋で一息。2 部屋ふすまで仕切られた良い小屋だ。

鉢ヶ岳はトラバースする夏道を行ったが、ここは東斜面ということもあって積雪期は尾根上に行くべきである。二重山稜が雪の影響で美しい三国境付近から白馬岳までは一部急な岩稜っぽいところがあるが、特に問題ない。このへんでまたガスってきた。幕営は村営小屋付近。冬季小屋はない。

1990 年 11 月 3 日(晴れときどきガス)

暖かい。山内さんと合流予定日。山頂からは絶景。あまりの暖かさにパンツ一枚でうろつき、身体を焼いたり読書したりとリゾート気分(?)天羽は熱あり休養日にちょうど良い。山内さんは現れず。

1990 年 11 月 4 日(みぞれ、ガス、暴風)

昨夜は気味悪いほど暖かく無風だったが今朝は四国沖低気圧の影響でうってかわって大荒れ。天候は悪化の一途。山内さんもこないなので、下山を決める(8:30 ただし、予定での最終下山開始時刻は12:00だった)ルートは大雪渓。途中デブリあり。11:00頃猿倉着。

下山後山内さんの下山連絡はないとのこと。

11 月 5 日依然連絡なし。西牟田OB、齋藤OB、鮎沢さん、坪井さん、天羽、古田 国立に集合、対策を考え一時捜索まで決定した時点で消息がつかめた。11 月 6 日山内さん小蓮華にてビバーク中とのこと。昼過ぎ下山連絡が入った。

この事件の詳細は当時の仮報告にあったが、主たる原因は合流形式における意思疎通の不徹底と、古田・天羽隊の大雪渓下山による下山路変更、山内さんの出発時刻変更にあったと言える。それはともかく、この 2 日間は時が異様に長く感じられた。ビバーク中の山内さんはなおさらだったろう。「時が解決してくれる」とはよく言う言葉だが、本当に時というのは、人間の様々な思惑と行動の裏返しなんだな、と痛切に感じた。

2 年間生意気な後輩の自主性を尊重していただき、maximin の精神に冷静な判断で部を引っ張って行ってくださった山内さんにはこの場を借りて改めてお礼申し上げます。

5. 富士山雪上訓練合宿

1990 年 11 月 23 日(晴れ)

五合目(11:30~12:00)ー訓練(13:30~15:30)ー五合目帰着(16:00)

1990 年 11 月 24 日(快晴)

起床(4:55)ー五合目出発(6:30)ー訓練(8:00~15:00)

ビバーク訓練 7. 5合目 山内、古田
5合目 天羽、田形

1990 年 11 月 25 日(快晴)

7. 5合目隊 7 合目着(6:50)、5合目隊 7 合目到着(7:50)ー訓練(8:15~10:15)ー頂上(13:15)ー5合目(16:40)ー吉田駅(21:20)

<総括>

今回の合宿は基本から冬山技術を学びなおすために行った。天候のも恵まれほぼメニューをこなせたと考える。しかし、反面、このおかげで冬富士の厳しさを過小評価することになる恐れもある。特に登頂における綱渡りの歩行は反省する必要がある。よって、新入生を登頂させるとき、conventional wisdom に頼った判断をしてはならない。この山行で時間的配分の上でややたりなかったのは歩行(アイゼン)とピッケルストップであった。この意味で、基礎を今後も再確認しつつ練習、本番にのぞまねばならない。

6. 白馬岳後発隊(春合宿偵察)

メンバー:山内 太

<前置き>

この山行は、2 年生古田、天羽と白馬山荘にて合流し、不帰嶮の偵察をすることが目的であった。しかし、山内個人の準備の上での不備により、入山が遅れ、その後の悪天ともかさなり、結果的に合流は不可能となり、遭難騒ぎをも起こすこととなった。

1990 年 11 月 3 日(快晴)

前日の夜行に乗り遅れ朝に東京をスタート。ゆうがたまでに、白馬大池につき、ステーションビバークをする。(なぜ、きちんと連絡をしなかったか?)

1990 年 11 月 4 日(雪、強風)

椋池山荘(9:00)→天狗原(10:30)→乗鞍岳手前(11:30 ビバーク)

風雪とガスにより単独では行動不可能と判断し、乗鞍岳手前の岩陰にてビバーク。

1990 年 11 月 5 日(ガス のち晴れ 強風)

スタート(11:30)→乗鞍岳ケルン(12:00 強風にて待機、乗鞍岳ピストンの隊に遭遇し、OB の西牟田氏への連絡を頼む)

1990 年 11 月 6 日(快晴 強風)

スタート(6:30)→小蓮華岳手前(9:00)→下山

結果的に体力の限界を感じ、最悪のケースである二重遭難を避けるべく下山。古田、天羽の無事

下山を確認。

<反省点>

- ・計画上の無理;合流など非常識な計画
- ・事前の連絡網の欠如;OB、在京連絡先との連絡
- ・計画実行能力;予定の列車に乗り遅れる
- ・装備上;山内は火器類を持っていなかった。11月の山を甘く見ていた
- ・構造上;少数の上級生に過度の負担をかけるべきではない

7. 燕岳～大天井岳～常念岳～蝶ヶ岳～鍋冠山(冬合宿)

メンバー;山内(CL)、古田(SL)、天羽

1990年12月15日(雪)

中房温泉へ入山。露天温泉にてくつろぐ。

1990年12月16日(晴れのち雪)

スタート(7:00)→合戦小屋(11:00)→燕山荘付近(14:30)

前日の猿を追いだしての露天温泉のせいで、天羽のピッケルが盗まれる。しかし、大事にはいならず、登山開始。三人でのラッセルということもあって、思うより先に進まない。ただ、地域的条件(最も他に位置する連山、黒部などは大雪となっていた)をいかし*雪にもめげずほぼ予定通り燕山荘に着く。

1990年12月17日(快晴)

燕岳往復(7:00~8:30)、幕営地スタート(8:30)→大天井岳(14:00)→大天荘付近(14:30)

難なく燕岳を往復した後は南下する。蛙岩では予想以上に苦勞する。他隊の報告によると、中の空洞を通過できるとのことだったが(偵察でも同様に認識)古田以外は荷がつかえ通過不能、ゆえに夏道の雪を一からどけて強引に乗りきる。為右衛門吊岩は、寡雪のおかげで効率的に通過。やや天羽のペースがのろい。切通岩後のトラバースはクラストが程良く形成されていて、ザイルは出さずに通過。また、大天井岳直前は強風であったが、ルートは予定通り直進ルートにとり、50mほどの岩尾根を越え頂上に立つ。幕営適地の関係でこの日は屋や時間的に早いが大天荘付近に泊る。槍・穂高のダイナミックな姿。

1990年12月18日(晴れ)

スタート(8:30)→常念小屋(11:00)→常念岳頂上(13:00)→コル(14:05)→幕営地(14:40)

強風とガスのため、朝のスタートを遅らせる。スタートしたものの風が強く、横通岳付近まで非常

に苦労する。とくに、東大井岳と横通岳のコルまでは視界がきかずほとんど偵察の暗記を基に行動していく。常念小屋付近にて、天羽の体調がやや悪化したが、本人の意思および全体のムードで常念岳を一気に乗越し問題なく幕営地まで達する。この日のポイントはやはり東大天井岳直後の処理で、へたをすると雪崩が発生しても不思議ではない地域であった。

1990 年 12 月 19 日 (快晴)

スタート(6:30)→蝶ヶ岳(9:30)→大滝山(14:00)→八丁ダルミ手前(15:00)

この日は快適なラッセルをこなしつつ前進。ただただ歩き続ける。穂高岳が美しい。技術的に問題となることはまったくなし。

1990 年 12 月 20 日 (晴れ)

スタート(7:00)→鍋冠山(8:30)→林道(10:00)→三郷村→松本

穂高岳が見えない。これ以外はすべて前日と同じ。平和な下山であった。

<総括>

田形が行けなくなり、三人の冬合宿となったが、条件に恵まれ NO スペアーで完了。現時点でも実力を考慮すれば、今後につなげる意味でもかなり点数は高い。偵察山行の情報を効果的に活用できたことも評価できよう。

ただし、基本的な冬山生活技術(特に朝)を機能的に活かす必要があり、Total な面としての精神力の不足が部分的にであれ体力、体調のコントロールをゆるめたことも事実ではあるまいか。また、技術的にはやはりアイゼンの歩行にまだ改善の余地がある。特に岩尾根を登るときなどツメのかけかたにまだ不慣れが見られる。いずれにしても、十分な Intoroduction として位置づけた

い。

山内

8. 八ヶ岳天狗尾根(プレ春合宿)

メンバー;古田、天羽、田形、(山内)

1991 年 2 月 25 日(晴れ)

清里 → 登山道入り口 → 天狗尾根(12:00) → ビバーク地(15:00)

今回の山行は、春合宿での拇海新道を目標とし、新しい隊の実力を把握することが主なねらいであった。最初から田形が遅れ、谷筋から天狗尾根まで登るのにも天羽、田形がラッセルに慣れていなかったため非常に時間がかかった。予定の大天狗まで行けず、ずっと手前でビバークした。そのときまだ3時であり後から考えるとあと1時間頑張るべきだったと反省が出た。

1991 年 2 月 26 日(晴れ)

出発(6:00) → 大天狗(15:00) → ビバーク地(19:00)

岩らしいところはほとんどザイルを出さざるを得なかった。そのため、ペースが落ちた。雪上を歩くことに慣れていないばかりか、岩にも全く慣れておらず、大天狗を右にトラバース気味に登るところで一番時間がかかり、暗くなっていく中で力が尽きて半べそをかく者と、怒鳴り散らす者と隊が全くバラバラになってしまった。なんとかヘッドランプをたよりに小天狗の下のコルにたどりつきそこでビバーク。強風にあおられなかなかツェルトが張れず、銀マットを飛ばす始末だった。

※大天狗と小天狗が逆か？

1991 年 2 月 27 日(晴れ)

小天狗(6:00) → 赤岳 → 硫黄岳 → 赤岳鉱泉(14:00)

一般登山道に入ったので進むのは楽だった。だが、昨日のことで、各々が他の隊員に対して不信不満をいだきながらのあまり楽しくない山行となった。途中で赤岳鉱泉から入り様子を見に来た山内と横岳付近で合流。硫黄岳まで行き、赤岳鉱泉まで下りる。その夜反省会が開かれ、現状のまま行動するのは危険という結論に達し次の日の阿弥陀岳北稜をとりやめて下山した。

結局、今回山行の目的であった隊の実力じたいは嫌というほどわかったが、それが一番ヤル気のあるリーダー格の古田をやめさせる原因になったのは悲惨なことであった。部に残った天羽、田形は今後部を作っていくうえで山に登る意欲、個々の実力等をよく検討するという大きな教訓となった。

9. 個人山行

長沢背稜 → 雲取山 → 石尾根

メンバー: 古田、田形(文責)

1990 年 12 月 8 日

この山行は、もうすぐ行う冬合宿のために、と古田が企画(?)してくれたものだ。初日のこの日は、昼過ぎに奥多摩駅に着き、バスで東日原へ。ここから 2 時間ほどの登りで一杯水避難小屋に着いた。この避難小屋はとてもしっかりしていて感心してしまい、これ以後自分は避難小屋のファンとなってしまった。

初日はこの小屋で寝たのだが、いっしょに泊っていたおっさんのイビキがひどくてまともに眠れなかった。

1990 年 12 月 9 日

この日はうんざりするような一日になった。朝 4 時ごろ出発して奥多摩駅についたのは夜の 8 時くらいだったろうか。自分は、冬合宿のためにとプラブーツをはいていたが、最後の方になると足がかなり痛くなっていた。そして、それは真っ暗闇のなかをヘッテンをつけながら石尾根の下部を歩いているときに頂点にたっていた。このとき自分は完全に不機嫌になっていて(このあとの部分はカットされている)

10. 御前山、三頭山

メンバー; 古田、田形(文責)

1991 年 3 月 14 日

1991 年 3 月 14 日

この山行自体は何の目的もない。ただのピクニックである。この日の夜 9 時ころ奥多摩駅で待ち合わせて御前山の方向にある避難小屋へと向かった。この小屋に着いたのは夜 11 時ころだった。この小屋もなかなか立派なもので感心した。そこで、持ってきたいろいろな食事を 2 人で楽しんで、寝たのは夜中の 2 時くらいだった。

1991 年 3 月 15 日

この日起きたのは 8 時ころ。べつに計画を立てて行く山行でもないので、ゆっくりしていてよかった。そして、御前山山頂を通り奥多摩道路を横切って三頭山へ。ここからドラム缶橋を渡って奥多摩駅の方へ行こうと思ったが、ドラム缶橋が使えない。ということで、数馬の方へ降りてバスで武蔵五日市駅へいくことにした。